

2024年4月21日 礼拝説教要旨

ハイデルベルク信仰問答講解説教Ⅱ 43 「思慮深くあれ」

詩編15：1～5、Iペトロ4：7～11

問112第九戒では、何が求められていますか。

答 わたしが誰に対しても偽りの証言をせず、誰の言葉をも曲げず、陰口や中傷をする者にならず、誰かを調べもせずに軽率に断罪するようなことに手を貸さないこと。かえって、あらゆる嘘やごまかしを、悪魔の業そのものとして神の激しい御怒りのゆえに遠ざけ、裁判やその他のあらゆる取引においては真理を愛し、正直に語りまた告白すること。さらにまた、わたしの隣人の榮譽と威信とをわたしたちの力の限り守り促進する、ということです。

第九戒の背景には、法廷、裁判があります。わたしたちが怒って誰かの悪口を言うとき、わたしたちはその人を裁いています。自分が裁判官になって「あの人が悪い」と断罪しているのです。そこで思い出していただきたいのは、創世記の蛇の誘惑の話です。蛇は、人を誘惑するとき「それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存知なのだ」（創世記3：5）と言いました。この誘惑に負けてアダムとエバは木の実を食べました。それは神さまを差し置いて、自分が神さまのように善悪の判断の基準になることを意味しています。そこでの基準は、神さまではなく自分です。自分こそが真理なのです。その自分に照らし合わせてそぐわないものを裁くのです。そこに人間の罪の本質があると考えてもよいでしょう。そこで人は神さまの義ではなく、自分の正義を貫くようになります。自分の正義が曲げられることが赦せなくなる。そこに怒りが起こります。人の正義感は、怒りや憎しみと表裏一体にあります。時に正義感が暴走して誰かを傷つけることが起こります。

その最たるものが戦争です。戦争にも双方に正義、大義名分があります。それを貫くために相手を攻撃し、侵略し、押さえつけ、支配するのです。自分以外のものは悪だ、偽りだ。そのようにして相手を断罪し、攻撃します。そこでは暴力も肯定されます。でもそういう人間の作り出す正義の犠牲になって悲しむ人々がどれほど多いことでしょうか。小さき声はかき消され、真実は押し曲げられ、隠蔽されていきます。この信仰問答の言葉の背後には、そういう悲しみが潜んでいるように思われてなりません。わたしたちは、ただ自分の正義感だけで相手を裁いていないでしょうか。他者の存在が不在になっていないでしょうか。何より神さまが不在になっていないでしょうか。誰かを裁く前に、そのことをよく考える必要があります。

イエスさまが十字架につけられた時のことを思い出すと、そこでも裁判が行われました。まずイエスさまはユダヤ人の最高法院に連れて行かれました。「祭司長たちと最高法院の全員は、死刑にするためにイエスにとって不利な証言を求めた」「多くの者がイエスに不利な偽証をしたが、証言は食い違っていた」（マルコ14：55～56）とあります。イエスさまを死刑にするために公然と偽証が行われています。最初から死刑ありきで裁判の体をなしていません。嘘やごまかしに満ちた裁判で、イエスさまは裁かれ死刑の判決を受けました。これこそ茶番でなくてなんでしょう。

続いてピラトのところへ連れて行かれます。ローマ帝国に死刑の最終的な判断は委ねられていたからです。ピラトによる尋問がありますが、その中でイエスさまは次のように言われました。

「わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に来た。真理に属する人

は皆、わたしの声を聞く」(ヨハネ18:37)けれどもその真理に耳を傾ける人は誰一人おりませんでした。それよりも群衆の声に負けて、身の保身から、ピラトは死刑にするためにイエスさまを十字架に引き渡しました。なんと偽りに満ちた、不公平な裁判でしようか。けれどもイエスさまはあえてそのような欺瞞に満ちた裁判で裁かれ、十字架をお引き受けになられます。それはそのようなわたしたちの嘘やごまかし、欺瞞に満ちた罪、自分が神になって裁く罪をイエスさまご自身が担われたからに他なりません。

そしてイエスさまの十字架によって、この罪を贖われ、よみがえりの命へと召された者は、偽りではなく、真理へと導かれていきます。信仰問答にあるように「真理を愛し、正直に語りまた告白すること。さらにまた、わたしの隣人の荣誉と威信とをわたしたちの力の限り守り促進する」という新しい生き方が始まるのです。それまでは隣人ではなく、自分の荣誉と威信のために、それを貫くために生きてきたわたしたちです。それゆえに自分が神さまになって人を裁いてきました。けれども、もう一度神さまの御前に、御言葉の前に謙虚に自分自身を省みる歩みが始まります。誰かを調べもせず軽率に断罪するようなことはなかったか。誰かの言葉を曲げ、陰口や中傷してこなかったか。今日の御言葉にもありました。「思慮深くふるまい、身を慎んで、よく祈りなさい」(Iペトロ4:7)

「思慮深く」とは、賢く、上手に生きることではありません。「嘘も方便」のような、時には嘘も使い分けて賢く振る舞うことではない。わたしたちはそんなに器用ではありません。失敗することもあります。でも人はそこで自分を偽り、嘘で塗り固めるような生き方をしてしまうのです。そうやって誰からも責められないように、指摘されないようにしている。生きづらい世の中です。けれども、わたしたちは自分を装う必要などありません。イエスさまは、わたしたちのありのままを赦すために十字架におかかりになられたのですから。だからもっと正直に、ありのままにいてよいのです。

その恵みを思い、誰かの荣誉と威信のために自分が何をすることができるのかを考え行動するところに本当の「思慮深さ」があります。間違っていると言って誰かを裁くのは簡単です。でもわたしたちが正義感に燃えているとき、わたしたちの言葉が、誰かを傷つけたり、貶めたりしていないか。もっと誰かのために、誰かの救いになる言葉を語ることはできるのではないか。

「語る者は、神の言葉を語るにふさわしく語りなさい」(Iペトロ4:11)神さまの御言葉を託されているわたしたちは、その思慮深さに生きることができます。

天の父よ。ただ自分の正義だけになっていることがあります。それで軽率にも人を裁き、傷つけ、自分の正しさを主張するようなわたしたちです。またあなたを見失い、あなたを差し置いて、断罪し、傲慢にも人を裁いているわたしたちです。どうぞお赦してください。どうか思慮深さを持って、言葉を吟味し、人を愛し、生かし、造り上げる言葉を用いることができますように導いてください。主の御名によって祈ります。アーメン。